

● 会館で初のお葬式がありました。初めてのことで、どのように会場を作っていいか、とまどうこともありました。が無事終了いたしました。お通夜が20数名、お葬式が40名程度のご参拝でしたが、遺族の方にもとても喜んでいただきました。とまどったことのいろいろをあげて見ます。まず、葬儀社がどこまで担当をすればいいかわからなかったこと…事前の打ち合わせをよくしましょう。受付をどこにするか…1階玄関エレベーター前にしました。早く帰る人のための焼香台がなかった…次回からは用意します。通夜の宿泊をどのようにするか…貸し布団を葬儀社が手配し、フローリングに布団を引いて寝ていただきましたが、それで十分だったそうです。



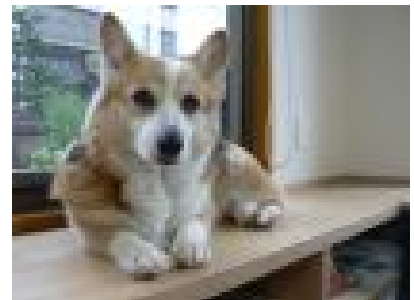
● 春先、裏庭の雑草をむしってゴミ箱に入れておきました。数日後ごみを出そうとふたを開けたところ、すごくいい匂いがします。これはただの雑草ではない、ハーブに違いないと、残った草を別の場所に植えて増えるのを楽しみにしています。この草はレモングラスだろうと思っていましたが、それは熱帯性の草で、雪の積もるところでは育たないそうなのです。でもこれは高森の家の庭先に雑草のように育っています。ではこれは何か、名前が分からないもの

のを調べるというのはなかなか大変です。事典を引くにもまず項目名が分からないと引けませんから。でもインターネットのおかげで、何とかこれではないかというものにたどり着きました。「はるがや」「バニラグラス」ともいう牧草だそうです。確かにこの草はバニラのような匂いです。名前が分かると雑草より親しみがわくようです。私たちがオイコラより名前を呼ばれたほうがうれしいですね。

● テレビで今度の中越沖地震のとき犬に助けられたという話をしていました。バーベキューの準備をしていたら、犬がひどく吠えるので犬を放して一緒に行ってみたら、いままでいたところが地震で埋まったとか。私は東京にいたので、うちのチョコはそんなことなかったの、と家族にたずねたら、本堂でご法事のお勤めしていたら、茶の間でひどく吠えていた、そのあとご法話をしていたら地震があった、と思い出しました。あらためて、お前も偉かったんだねと、なでて、ごほうびにパンをひとかけあげました。せっかくチョコに教えてもらったのに、それに気づかない私たち、仏さまと私たちの関係みたいですね。

仏壮のお知らせ

8月6日(月)午前8時より
境内の草取りをおこないます
ご協力をお願いいたします
毎月6日は朝参りを6時半より行
っています。朝早くおいでになれる
方はお参りからご参加ください。
朝早く出るのは無理な方
8時よりご参加ください。



ひかりの中で

大平 光代

手を合わせることは情操教育

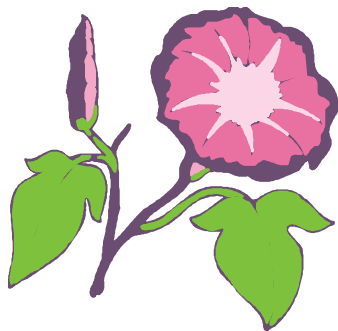
人として「大切なこと」を教えられないまま、非行や犯罪を繰り返す子どもたち。そんな暗闇を生きる子どもたちに、少しでもひかりを照らしたら……と仏教を学び始めた私。娘を抱っこしながら勉強を続け、ようやく通信教育 3 年目のスクーリングを終えることができました。

いやー、なかなか大変でしたヨ。とくに 2 日目は朝から夕方まで「筆記」「お勤め」「伝道」と試験が続く。クタクタヨレヨレ。でも弱音を吐いてはいられません。受講生は私よりも年配の方がほとんど。皆さんの頑張る姿に接することができたのが、私にとって一番の学びとなりました。

幼い頃、おばあちゃん子だった私は、お仏壇に手を合わせる事が生活の一部だったのを思い出します。「まんまんちゃんは見えてはるよ」といつも祖母が口にかけていた言葉から、目には見えないけれど、大きな力が存在していることを子ども心に感じていました。それは畏怖の対象であると同時に、安心に満ちた世界であったように思います。月忌参りのご住職が手を合わせる私に「かしこいなあ」と褒めてくださるのもうれしかったです。

私が非行から立ち直れたのは、きっと幼い頃のこんな経験があったから。手を合わせることは心を育てる情操教育だったのです。現代の子どもたちは、そうした大切な部分がすっぽりと抜け落ちているのかも知れません。だからこそ、お寺の果たすべき役割は今後ますます大きくなるのではないのでしょうか。行き場を失った子どもたちの過ごせる場所が、お寺であれば素晴らしいですよ。

さあ、これからは試験のためではなく、自分自身のための勉強が始まります。心から仏教の勉強を楽しむつもりです。



「大乘」2007年7月号より

死者が漂わせる和気

作家 青木新門

私は ―中略― 葬式の現場で働いていた時、不思議に思うことがありました。

愛する親族の死は誰もが深い悲しみに直面するのは自然のことです。しかしそんな悲しみの中にも和気が漂っている家と、悲しみや怒りが渦巻く家があることに気づいたのでした。

最初のころは、怒りや悲しみが渦巻くのは当然で、むしろ悲しみの中に和気が漂っていることが不思議に思えるのでした。私は、遺族に笑顔さえ見られるあの和気はなんだろう、あの和気はどうして生じるのだろうと思うようになっていました。

やがて、悲しみの中にも和気が漂っている家は、親族が悲しみを共有しながら臨終の場に立ち会っていて、死に往く人が柔和な顔で亡くなった家であることを知りました。

―中略― 人が死に直面した時、「否認」「怒り」「取引」「抑うつ」「受容」といった五段階の過程をたどるとあります。私は、この本を読んだとき、これら死に往く人の心の動きは、残された遺族たちが親族の死に直面した時も同じような過程をたどるのではないだろうかと思ったのでした。そして、あの和気を漂わせていた家は、死者が死の間際に仏性（＝遇斯光）に出遇って執着や怒りが消滅した証として柔和な顔になり、和気を漂わせていたのではないかと思ったことでした。

前に生れんものは後を導き

後に生れんひとは前を訪へ

これは親鸞聖人が、『教行信証』のあとがきに『安楽集』から引用されているお言葉です。「前に生まれんもの」とは先にお浄土で生まれた者の意です。先にお浄土に生まれた者が残された者を導くために、和気となって顕れていたに違いないと思うのでした。

あの和気は、仏性の働き、すなわち阿弥陀如来の 恵み であったと、親鸞聖人のみ教えを通して確信するのでした。

「御堂さん」2007年8月号より

